

移情閣（孫文記念館）友の会会報(N0126)

「前事不忘後事之師」を心に刻み、「日中国交正常化50周年記念 魯迅美術学院 王希奇教授 愛と償いの神戸展」は、9月4日成功裏に閉幕!! 4日半で2000名超の来場者! 日本のマスメディア7社で14回、中国の人民日報でも報道!!

(1) はじめに

魯迅美術学院の王希奇教授は、「一九四六」大型の歴史題材絵画を創作する志を立て、5年半の歳月をかけて、「葫蘆島大送還」という中日関係史上、重要な意義を持つ歴史的な事件を描き切りました。この長さ20m×高さ3mの巨大油絵作品は、2017年より東京・仙台・舞鶴・高知などの地で連続的に展示され、数多くの日本人が魅惑され観覧にきました。

今回、中日国交正常化50周年記念事業として、2022年8月31日から9月4日までの間、兵庫県立美術館原田の森ギャラリー(神戸市)で展示されました。



(2) 神戸華僑への感謝

中国と縁の深い神戸での絵画展開催に当たり、神戸華僑の皆様のご尽力には、誌面をお借りして改めて深謝申し上げます。神戸華僑総会の機関紙には、神戸展ビラの差込みをさせて頂きました。また、神戸中華同文学校や神戸華僑幼稚園では、生徒や児童と教職

員向けに 1000 枚ものビラを配布して頂き、同校の生徒やご父兄の皆様から、4名のボランティア参加がありました。受付業務の他に、最終日の2時間にわたる搬出作業まで、大変熱心にお手伝い頂きました。

また、NPO 法人国際音楽協会理事長の張文乃様には神戸華僑総会や生田神社に交渉して頂き、日中文化交流の証となる「神戸南京町」と「生田神社」のそれぞれの獅子頭の展示にご協力頂き、会場の一面にコーナーを設置することができました。

(3) 忘れてはならない日清戦争の負の遺産

世界の華僑の数は、約 4000 万人と言われていています。華僑が世界へ出ていった理由は、日清戦争後の極端な貧困のためです。日清戦争の敗戦で、中国は年収の3年分の賠償金を日本へ払うことになりました。そのため、イギリスやフランスから借金を重ねた結果、国内の鉱山採掘権や鉄道敷設権などを譲り、更に関税までが外国人の手に押さえられました。外国の力を背景にした軍閥間の戦争は絶え間なく、国力は衰退し国民は生活の道を失い、家族は散り散りになり、外へ外へと出たのが華僑の歩んできた道です。

(4) 開会式での薛劍総領事の挨拶



薛劍大阪総領事(2022年8月31日)

薛劍総領事は「一九四六」神戸展開幕式で、習近平主席の発言に言及し「歴史を心に刻むのは、恨み続けるためではなく、共に戒めとしていくためである。歴史を伝承するのは、過去に捉われるためではなく未来を切り開いて、平和の松明を代々伝えていくためなのだ」と

強調しました。更に「平和友好こそが、最も有効で信頼できる安全保障なのです。私は今回の神戸絵画展が、より多くの日本の人々に、戦争の真相を理解させ正しい歴史観を樹立させ、中日平和友好の確信を強化させて、人類運命共同体を構築するという崇高な目標に向かって、共同して絶え間なく努力することを期待しています」と述べている点を強調したいと思いません。

(5) 感動を呼んだ日本経済新聞文化面の記事

日経新聞で神戸展を紹介して貰いまさした。過去の「一九四六」を通して初の快挙でした。開催直前の8月29日(月)に、最終ページの文化面に掲載されました。他のマスメディアとは異なる切り口で、王先生への取材がされていて、全国から大きな反響がありました。

福岡県にお住まいのM様は85歳で、葫蘆島経由での引揚者でした。日経新聞の記事をご覧になって、お電話を頂きました。資料請求を受け、動画や写真付きの資料をメールや郵送で送付しました。M様からのお礼のメールを頂き、目頭が熱くなりました。ご本人の許可を貰い掲載します。

「ご多忙中にも関わらず、王希奇先生の絵画に関する多くの資料を頂き有難うございました。毎年八月前後、メディアは敗戦にまつわる記事で賑わいますが、私にとってはこの「一九四六」こそ、最も心打たれた出会いになりました。あの時、葫蘆島埠頭で乗船を待つ引揚げ者の群れと同じ体験を、繰り返し動画を見ることによって、改めて希望と不安の入り混じった感情が蘇った次第です。「一九四六」展が宮原様のご尽力と、多くの著名な方々のご賛同を得て開催されたことは、素晴らしく有り難いことだと大変感謝いたしております。つきましては経費の一部にと月曜日、ご指定の口座に心ばかりお振り込みをさせて頂きたく、よろしく願いいたします。」

M様からは多額のご寄付を頂きました。私は人生意気に感じる九州男子ですので、85歳のM様のためにも、未開催の九州地区での開催に向け検討中です。

改めて思いました。芸術や文化にはこんな感動があるのですね。私はM様の感動的なメールを、日経新聞記者にも転送しました。感動が感動を呼び、新たな感動を求める起爆剤が、私の心に宿った瞬間でした。

日中友好を心な刻み。史記の司馬遷が述べた「前事不忘後事之師匠」の故事の教えに覚醒した絵画展でした。